

「家がいいね」 第212号

いせ在宅医療クリニック 広報月刊紙

2022.1.4



寒風の勢田川沿いに花があり、四季桜だと教えていただきました。冬に葉が落ちて咲き、春の二季咲きと言われます。誠に自然は不思議です。人を喜ばせるために咲くわけではないのにと。

コロナ禍も結局はヒトの営みの結果？



明けましておめでとうございます。金剛證寺の智恵寅は、昨年初の200号にもお背中を見せておられましたが、今回は触れてはならぬと、悩ましいお顔でした。もう2年、人の知恵の乏しさが社会的混乱を引き延ばしているのは情けないとも問題なのは、ウィルスよりも人間でした。感染したかどうかで、人を分けることを単純化してしまうと、すぐに敵か味方かに行き着く考え方になってしまいます。この市中戦争のような取り扱いでは、誰もが疑心暗鬼。小さな声しか出せない社会的弱者が一番の被害者で、弱いことも自己責任にされ、コロナはその構図を炙り出しました。

お互いを思い遣ることが何故できなくなってしまうのでしょうか。「自分が」と、損をしないような行動を取るのが当たり前の時勢を感じます。底の無い孤独の中で、普通に生きる人を巻き添えにするような犯罪も目立ってきています。立川談志は、「礼儀作法」は「協力を前提とした発展途上国の不文律だ」と看破しました。資源が乏しいからこそ仲良く物も時間も共有するのが礼儀かもしれません。物もあり、傍若無人な振る舞いも見過ごされる国を、変えるのは今からです。本当に持続可能なのか自分の頭で考える時です。

在宅医療の見通しについて思うこと

コロナは人を分断。ただ各個に分けられて臓器治療は容易に進みます。退院の意思確認が困難な自宅介護より、個別化し調整し易いと施設へ誘導管理していないか私は危惧します。在宅ケアは人を結んでこそ継続が可能です。死ぬまで生きる姿を生活の中で過ごすのは稀になりそうです。生ける智慧を子供たちに返す大事な局面です。自宅での在宅医療はこの先も絶やすものではないと、私は思います。

言葉は、じっくり味わいたいものです

（どの一生も）

どの一生も言葉に尽くせない

一輪の唯一の花と星の地上に同じく開き

誰の哀しみの理由にもならず宙に帰る

谷川俊太郎 詩集「虚空へ」
2021年 新潮社
→大晦日の外宮かがり火



いせ在宅医療クリニック
自宅での人生を 最期まで支援します
〒516-0805
三重県伊勢市御薊町高向 927
電話 0596-20-8104
ファクス 0596-20-8105
メール homecare@kr.tcp-ip.or.jp
<http://isezaitaku.com>

→バックナンバ閲覧可

